

## 『こころ』明治所感

Junko Higasa 2015.7.7

漱石『こころ』にある「天皇に始まり天皇に終わった明治」それは、かまどに烟立つ京みやこのような平和を願い、さらに日本を世界に通用する国に育てるために、臣民と共にありながら政府の動向に目を配り、私見を捨てて公義のために自身を律した明治天皇の治世を表す言葉である。その人間味あふれる独立精神は人の心を惹き付け、出自にこだわらず才能を活用する手腕は、統治者として国内外の賞賛を得た。それほど心を捉えた「明治=天皇」が世を去った時、その「支柱」を仰ぎ「向上」へ向かって上り続けた人々は、自分の人生のゴールを見失った事だろう。

乃木希典殉死は、多くの兵を死なせた慙愧の念、天皇への思慕と云われるが、その根底にあったのは、苦境に耐える意義そのものを失った自己の人生の喪失感ではなかったろうか。そして乃木への批判には、天皇が託した「向上心育成」の任を果たさなかったことへの、深淵にある亡き天皇への信望から起こる憤懣の情も含まれていたのではないだろうか。

死を願い出る乃木を制した「今は死ぬ時に非ず」という天皇の言葉は、西洋文明輸入で急速に発展したが、過度の西洋化により日本の徳性が緩みつつある今、日本の精神と平和を維持するために、生きて「乃木の持つ自己を律して贅沢に傾かない精神」を次世代につなげてほしいという意味だったのではないだろうか。乃木なればこそその役割を全うせよ、と。